



戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

— 「用語編」 その1

原田 広（非文字資料研究センター 研究協力者）

はじめに

非文字資料研究センターが所蔵する戦意高揚紙芝居コレクションについては、先に、本センターの年報『非文字資料研究』第10号「資料紹介 戦意高揚紙芝居コレクション」で、資料の概要・公開上の課題および本センターの研究上の展望を紹介した。その後、本センターの第三期共同研究として、「戦時下日本の大衆メディア研究」班（代表：安田常雄、期間：2014-2016年度）の立ち上げが予定通り行われ、共同研究の主要成果目標の一つとして、本紙芝居コレクション全241点の解題を作成・刊行することが確認されている。これをふまえ2014年度前期中までに、解題作成作業の基礎資料となる紙芝居脚本データの収集、著者履歴情報の調査、復刻雑誌『教育紙芝居・紙芝居』の記事分析などに着手した。

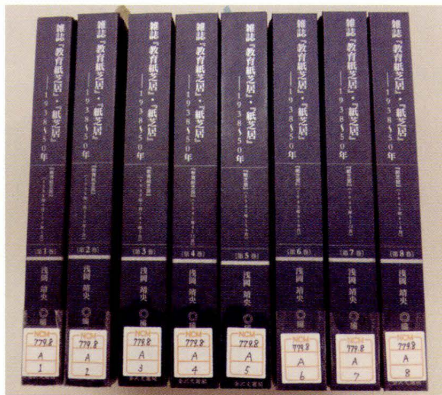


図1 復刻雑誌『教育紙芝居・紙芝居』

本稿は、センターが所蔵する紙芝居コレクション（脚本）から特殊に“戦時下の”と見做される用語および登場人物名を採録・分類した基礎資料にもとづくレポートである。一義的には、紙芝居脚本データを共有することによって、複数の研究者で実施する解題作業におけるコレクション全体への俯瞰性を確保するとともに、個々の作品解題作業の効率化を図ることが目的である。それと同時に、本稿では、紙芝居脚本データにもとづいて、本コレクションの戦時下の特性の解明作業につなげることを目的としている。この点は、上記「資料紹介」（付論）

において、今後の研究課題を、「漫画芸術の系譜にある紙芝居という庶民的媒体が、国威発揚という任務を帯びた時に発する無残さを解明するためには、紙芝居という媒体の『著者性・作品性』という観点から、文芸ものを含む一作品ごと或いは近接主題作品ごとの詳細な分析、困難が予想される脚本家・画家の連携関係や制作環境の調査が求められるであろう」と集約した筆者の問題意識の一端を継ごうとするものである。

この目的に沿い、本『ニューズレター』の場で、「用語編」「人名編」に分けて連載を行うこととしたい。二編に分割するのは、脚本からの採録時に求められる着眼点・集中度がそれぞれで異なるために作業自体を分けて行ったこと、また、時代の空気を一般的に反映し易い「用語」と、個別作品の主題・文脈によって自ずと選択が左右される「登場人物名」とでは、分析内容も、その結果得られる知見も異なるであろうとの予見によるものである。

用語採録の基準および分類

本紙芝居コレクションは、241点中の223点（92.5%）が太平洋戦争下の1941～1944年の4年間に印刷・刊行された作品群を中核としており、1938年の日本教育紙芝居協会の発足に年代的起点を置いた国策紙芝居の全容解明が、本センター共同研究の基本テーマとなっている。太平洋戦争の名称問題と絡めるまでもなく、いわゆる“戦時下”の年代的な上・下限を厳密に定義することは難しいが、一所蔵紙芝居作品の全体を見渡した地点からやや結論を先取りするというならば、近代日本のエリート（政治家、軍人、官僚、知識人、報道従事者等）が創作・流通させ、国民・各階層の生き方に少なからざる影響を及ぼした『軍人勅諭』1882年（明治15年）、『教育勅語』1890年（明治23年）から『国体の本義』1937年（昭和12年）、『臣民の道』1941年（昭和16年）に至る60年間余り、天皇制軍国主義のもとで我が国の歴史観を復古的に先鋭化させ、戦争観を全体化・高度化させてきた歴史が、曲折しながらも連続しており、それが1940年代前期に極限に達するという文脈のもとで“戦

時下”という歴史像を捉える立場があり得ると考える。採録作業に当たっては、そのような観点に立ち、紙芝居脚本の戦意高揚的文脈に置かれた用語・登場人物名を、歴史的にも地域的にも幅広く（むしろ網羅的に）拾い上げる方針とした。

採録に当たり、一作品中に同一用語・同一人名が複数回出現する場合は、初出のページ箇所を代表的に拾うこととし、作業の比較的初期の段階で分類のイメージを固めたうえで、同一の用語・人名について「作品マスター番号@ページ数」の記録を累積した。その結果、採録総件数は、用語が約 770 件、登場人物名は約 520 件を数える。各用語・人名の横欄合計件数は、所蔵 241 点の各一作品を単位とした出現回数を意味する。以下の文中、作品数は「点」と、採録数は「件」、その出現回数は「回」と表記して区別する（用語等に数字のみを付したものは回数の表示である）。連載第 1 回目の本稿には、紙幅の関係で、出現回数 3 回以上の分類用語一覧を巻末に〈別表〉として掲載することとした（「人物編」の掲載基準は別に示す）。

用語の大分類は、[国際関係 (01 ~ 05)]、[日本軍 (06 ~ 12)]、[国内社会 (13 ~ 23)]、[固有名詞 (25 ~ 26)]、[人物 (27)] の 5 区分とした。[人物 (27)] は、登場人物名ではなく、〈父〉〈母〉などの一般名詞である（ただし、チャーチル、ルーズベルト、近衛文麿など、戦時下を象徴する数名の人物名を [国際関係] や [国内社会] の範疇で採録している）。〈別表〉末尾に付した [時代 (28)] は、分類 5 区分とは別に、脚本と刊行年から推定される時代背景を、一作品・一時代として特定したものである。

頻出語から見えること

まず全体像を概観するために、紙芝居脚本データに表れる頻出語（便宜上 20 回以上とする）を降順に示すと以下のとおりである。いわゆる“戦時下”用語のまったく出てこない作品が約 70 余点あると見られるので、この頻出語とは、40 回で 24%、30 回で 18%、20 回で 12% と、かなり高い確率で作品に表れる用語であると考えてよい。

手紙、郵便、ハガキ、電報 43、銃後 36、母 33、天皇（陛下）（すめらぎ）31、皇軍 28、皇国（或はミクニ）（の御楯）（の興亡）28、日の丸、日章旗、国旗 28、御奉公 26、アメリカ（人）25、戦死（者）25、イギリス（英吉利）（英国）24、出征（兵士、軍人）、征途 24、支那事変（盧溝橋）

23、大東亜戦争 23、大東亜共栄圏（東洋新秩序、東洋平和、アジアの盟主、建設）22、戦地（戦場）22、工場 22、貯金（貯蓄、貯蓄報国、共同貯金、通帳、郵便貯金、落葉貯金、国体貯金）21、兄 21

この頻出語の組み合わせから、戦時下紙芝居の脚本の底流にある基本的なストーリー性をうかがうことができる。

- ① 〈銃後〉〈母〉（国内社会）と〈戦地〉にある〈出征〉兵士（父・〈兄〉など）とを結ぶほとんど唯一の手段が〈手紙〉であったこと。これが紙芝居のシナリオ（場面）展開の有力な小道具として使用される。
- ② 〈支那事変〉以降、〈大東亜共栄圏〉の理念を掲げ〈皇国の興亡〉を賭けた〈米・英〉との〈大東亜戦争〉において、〈日の丸〉に象徴される天皇の軍隊〈皇軍〉が多くの〈戦死者〉を生むことが日常化した社会であったこと。
- ③ その戦争体制を支える〈工場〉での生産強化・勤労動員、戦時財政を支える〈貯金報国〉をはじめとした国への〈奉公〉運動が展開されたこと。

このような頻出語が、大衆的メディアとして流通する紙芝居脚本家の創作意識にかなり一般的に反映した時局認識であったであろうことは疑いないが、例えば〈銃後〉と〈戦地〉の対語的・機会主義的な使用などが際立って目につくこともまた否定できない。〈銃後〉なる用語をタイトルに冠する日本近代文学作品としては、日露戦争を背景とした櫻井忠温『銃後』（1913 年）あたりが最古かと思われる（国立国会図書館所蔵調査）が、世界史的には第一次大戦の総力戦思想が生み出した〈銃後〉観念は、それから 30 年の年月を経て、戦時下社会に緊張とともにある種の磨滅を伴いながら浸透していったことをうかがわせる。その他の頻出語についても同様のことがいえるかもしれない。

01/ 国際関係：明治～昭和初期（1930 年以前）

用語分類の最初に、我が国が江戸期の鎖国政策を廃し、近代的な国際関係場裏に登場する明治維新以降、第一次大戦後の国際的軍縮会議までの時代認識を表現する用語をまとめた。近代以前は、基本的に我が国の「国史」として、あるいは王政復古理念を用意する江戸期の国学者や勤王の志士物語として扱い得るからであり、また太平洋戦争に接続する日中戦争以降の国際関係は、戦時下紙芝居のボリュームから見て別に扱うことが適切と考えたからである。用語の採録件数は 17 件である（以下、文



中の用語は出現回数〈3回以上〉《3回未満》で区別する。紙芝居脚本からの引用は原則として「イタリック」で現代仮名遣いに改め、用語は太字で示す。

この時代認識区分において、〈日露戦争〉が最上位であることは、明治以降の国際関係のもとで戦われた日露戦争が国際場裏における根底的・直接的な変化を助長する契機であったことを物語る。北（ロシア）への備えは太平洋戦争末期に至るまで重要な外交的・軍事的争点となる。関連用語として、《常陸丸》《富国強兵》《東郷元帥》《賠償金》《旅順》を採録した。続いて〈日清戦争〉関係が《清国》《長崎事件》《三国干涉》と合わせて8件、〈第一次（欧州）大戦〉後の《ワシントン軍縮会議》《ロンドン条約》といった用語が合計7件と、清末中国を巡る帝国主義間の利権闘争、欧米主導の軍縮会議などの国際関係のもとにある日本の姿を描こうとする作品も目立つ。

『進め一億、火の玉父さん』1942.2では「**日清戦争**、**日露戦争**、満州事変で一身を御国のために捧げ、壮烈、玉と散った先祖の御霊が大東亜建設は今だ、頼む」と励ます。第一次大戦は、日本から遠い欧州の戦争であったが、ロシア革命の指導者の著書を連想させる『我は何をなすべきか』1944.10.15では「**第一次大戦**で飛躍的に増加した弾薬の消費量は普仏戦争の180倍、マーシャル群島に米軍が打ち込んできた砲弾・爆弾はその2000倍」と兵器の近代化がテーマとなる。「**あの戦争**でのドイツの食糧不足」（『母さん部隊長』1939.4）、「**第一次大戦**の戦闘で敗北したフランスの戦意の薄弱、軍紀の弛緩」（『一億楠公』1944.10）と、戦時下の自国に引きつけた話題も登場する。「**ワシントン条約の廃棄**、**ロンドン条約からの脱退**」（『山本五十六元帥』1943.12）によって国際的孤立（無条約状態）を深め、やがて日中戦争に突入する大正末期・昭和初期から、「**（敗戦の困難を）日清戦争以前の国土と八年に亘る戦争で疲れた力で乗り切らなければならない**」という覚悟を描く『新生』（本コレクションの中では唯一戦後の作品）に至る時期までの原点的用語が、この時代区分の中に登場しているということができよう。その一方で、単独の戦争では、日清戦争13,309人（うち病死11,894人）、日露戦争約84,000人（『国史大辞典11』吉川弘文館、1990）に次ぐ約8,000人余の戦死者を生んだソ連赤軍・モンゴル軍との局地的戦闘「ノモンハン事件（1939年5月～9月）」は、この時代区分より後の紙芝居作品にも何故か一度も登場してこないことを付記しておきたい。

02/ 国際関係：亜細亜

この括りは、日中戦争以降、太平洋戦争に接続する時期のアジアを中心とした国際関係・時代認識を示す用語が頻出する国策紙芝居の主要なフィールドである。そのために採録用語数も全85件と多いが、①支那事変・満州事変を背景とした中国（支那・満州・中華民国）関係、②大東亜共栄圏関係、③これと密接に関係する南進論の系譜を汲む用語の三つの系統に大別することができる（以下、脚本から「支那」など当時の用語を部分的に使用する）。

共通して指摘できることは、「地名」の多さであり（③南進論関係では大半を占める）、しかも、現下の「戦闘地としての地名」ではなく、歴史的な文脈や回想シーンの中に埋め込まれることによって、単にエキゾチズムを喚起する以上に、日本（人）にとってもともと馴染み深い地域として想起させる効果をもたらししていることである。この点は脚本を示さないと説得力に欠けるが、紙面の関係で以下に「地名」のみを掲げる。

① 中国（支那・満州・中華民国）関係

南支4、上海4、北支3、北京3、朝鮮3、海南島2、揚子江1、シナ海1、天津1、中支1、大連1、関東州1

③ 南進論関係

ビルマ8、インド（印度）6、蘭印4、仏印4、タイ（泰国）4、安南3、ポルトガル3、スペイン2、南極1、千島、樺太1、印度洋1、印度支那1、メキシコ1、パリ1、ハノイ1、シャム国1、ジャカルタ1、シベリア1、カルカッタ1、カラチ1、アウチャ（アユタヤ）1

〈ポルトガル〉《スペイン》といった西欧の国名が③南進論関係に入っているのは、植民地宗主国・米西戦争の関係があるからであり、また海洋国家としての広がり誇る文脈において、《南極》《メキシコ》《シベリア》といった地域名までもが含まれているのも特徴といえよう。

続いて [02/ 国際関係：亜細亜] に分類した「地名」を除く用語使用を概略的に紹介する。

① 中国（支那・満州・中華民国）関係

〈蒋介石〉《汪主席、汪精衛》という象徴的人名、蒋介石と一体の〈重慶〉〈満州国〉〈支那（大陸）〉〈中華民国〉《青天白日旗》《中国》《国民政府》という清国滅亡後の入り組んだ国名で主要なシナリオを構築する中に、〈支那〉を冠した〈子供・人〉・《服・語・商人》などの聞き馴れた熟語が、紙芝居の風景的點描として配置される。〈抗日支那（暴戾）〉《排日》《共產軍》《便衣隊》（私服・民族服などを着用し民間人に偽装した兵士）などの敵対

勢力を示す用語で日中戦争の泥沼化（作品中では奮戦する日本兵士の姿）が印象付けられる一方で、〈満州〉に係る《建国記念日》《開拓団》《鉄道》《日満一体》《楽土建設》、さらに《新中国建設》《和平防共》といった日満支三国の〈大東亜新秩序〉の建設が謳われる。代表的作品として『光の歌』1942.7を挙げることができる。

作品に〈蒋介石〉が現れるのは、『貯金爺さん』1939.12が最初であるが、その後も『チョコレートと兵隊』1941.7、『進め一億、火の玉父さん』1942.2、『敵だ！倒すぞ米英を』1942.12、『撃ちてし止まむ』1943.3、『閻魔の廳』1944.12などの代表的な国策紙芝居に、日本に抗する中国の象徴としてコンスタントに登場する。その一方、山室信一『キメラの帝国』（中公新書、1993.7.25）によれば、1931年9月満州事変勃発当時の23万人に対し1945年8月には155万人に達していたといわれる在満日本人の物語は、『開拓女塾』（「大陸の花嫁」を養成するために1940年に創設された女子義勇隊訓練所）を背景とした『母は泣かず』1944.12一作のみである。

② 大東亜共栄圏関係

第二次近衛内閣（1940年7月22日～1941年7月18日）は、「基本国策要綱」（1940年7月26日）において、従来の日満支三国による東亜新秩序を発展させた〈大東亜〉の新秩序建設を打ち出し、国内の新体制確立とならぶ国策の基本方針とする。〈大東亜共栄圏〉は同年8月1日松岡洋右外務大臣の記者会見の声明が定着したものといわれる（大杉一雄『日米開戦への道（上）』講談社学術文庫、2008.11.10、p.274）。またその地理的範囲は、1940年9月16日大本営政府連絡会議決定『皇国ノ大東亜新秩序建設ノ為ノ生存権』により、「日満支を根幹とし、旧独領委任統治諸島、仏領インドおよび同太平洋島しょ、泰〔タイ〕国、英領馬來〔マレー〕、英

領ボルネオ、蘭領東インド、ビルマ、濠州〔オーストラリア〕、新西蘭〔ニュージーランド〕ならびにインド等」とされた。開戦後これは、〈アジアの盟主〉として西洋列強による〈東洋侵略〉《植民地》化から〈東洋平和〉を守り、《共存共栄》の〈東洋新秩序〉を建設することを目的とした《自存自衛（栄）》の戦いであるという聖戦理念（イデオロギー）となり、名称も「支那事変をも含めて大東亜戦争」と称することになる。戦時下の一連の作品群が、これらの〈大東亜共栄圏〉理念や戦争目的をほぼ無条件に（流行語的にというべきか）転用して成立していることは指摘するまでもない。戦争目的に関連しては、松本健一『日本の失敗』（岩波現代文庫、2006.6.16）が、「（後の東条内閣外務大臣）重光葵がこの戦争には動機はあっても目的がない」「自存自衛は戦う気分の問題で主張の問題ではない。東亜の解放、アジアの復興が即ち日本の主張であり戦争目的である」との戦略をもって、「1941年8月4日にルーズベルトとチャーチルが発表した大西洋憲章に対抗して東亜新秩序を位置づけ、その戦争目的が達成されれば終結を宣言できると考えていたと思われる」（p.311～313）と述べていることを紹介しておきたい。東亜民族の解放を謳うことによって、植民地主義が否定された第一次大戦後の国際関係のもとで日本のアジア進出の対等な理義を追及するとともに外交主導で対中国の局面転換を図ろうとする動きがまだ存在したのである。

③ 南進論関係

1941年12月8日未明、真珠湾攻撃の約2時間前、日本陸軍はイギリス領マレー半島に上陸、イギリス政府に対する宣戦布告前の奇襲によって太平洋戦争の戦端が開かれ、戦線は、中国大陆とともに、東南アジア諸国、太平洋の島々に飛び石的に拡大する。紙芝居作品では、東南アジア・南洋の諸地名を織り交ぜながら、〈南進（方、海、



図2 建設漫画会編『勝利への道』1942.9.15より



国、洋》とともに、『海洋（発展、国家、民族）』『海防』『海運国』といった南の海に誘う用語が多く使用される。この分類用語括りはあくまで「戦闘地以外」と定義し（上述）、『南海の侠児』1941.12、『海國の民』1942.7、『八幡船』1944.12、『南海の防人』1944.7、『子どもの海』1944.11、『海の男』1944.9といった歴史ものや漁民を描いた作品からの採録が主であるにもかかわらず、そうした傾向が見られる。研究者によっては実在を疑問視する『山田長政』1943.6は《図南》の先覚者（1915年贈従四位）として描かれる。このような一連の作品群の存在は、自国を歴史的な海洋国家として位置付けることで、南方の諸「地名」が日本（人）に馴染み深い地域を想起させることと相乗しながら、軍事的進出〈南進〉をある種の歴史的必然として描く効果をもたらしている。

03/ 国際関係：非枢軸国（欧米）

開戦に伴い、諸メディア（紙芝居も例外ではない）をととして国民の耳目に浸透していく「敵の顔」を表す用語を、[03/ 国際関係：非枢軸国（欧米）]として47件採録した。

天皇大権による開戦の詔勅が〈米英〉両国に対して発されたものであることを顧みるまでもなく、日本にとって「敵」とは先ずは〈アメリカ〉〈イギリス〉であり、続いて日本に宣戦布告した重慶の蒋介石政権（大日本帝国の政権未承認国、12月9日）と、『オランダ』（ナチスドイツに降伏したロンドン亡命政府指揮下の蘭印総督府、12月10日。日本の対蘭宣戦布告は1942年1月12日）からなる連合国（非枢軸国）であった。この四カ国を指して〈ABCD包囲網〉と名付けたのは日本側である。これは、日中戦争の長期化の原因である援蒋ルートの遮断とともに、南方の戦略的資源（特に石油）の独占的な確保を目指した南進政策に対する連合国側への軍事的・経済的包囲網の別名であり、これら四カ国への敵愾心を煽るうえで大いなる効果があったといわれる。戦時下国策紙芝居の代表作ともいえる『大建設』1942.3、『敵だ！倒すぞ米英を』1942.12、『撃ちてし止まむ』1943.3の三作品に〈ABCD包囲網〉の用語が登場する。

第二次大戦が「ファシズム対デモクラシー」のイデオロギー戦争であるとともに、「人種戦争」の側面があることを指摘し詳細に分析したのはジョン・ダワー『容赦なき戦争』（平凡社ライブラリー、2001.12.1）である。「人種の憎悪が残忍性を煽り、その残忍性が今度は人種の憎悪の火に油を注いだ。他者を非人間化することによって、

相手との間に心理的距離が生まれ、それが戦場ばかりか遠く離れたところにいる戦略家たちによって決定される作戦での殺戮を、しごく容易にした」（p 46）と述べ、プロパガンダに使用された漫画等をととして欧米人・日本人の双方から見た人種戦争の実態を分析した本書は、国策紙芝居の解釈にも多くの貴重な視点を提供している。

ダワーはこの中で、「真珠湾攻撃の二ヵ月後、（中略）最も精力的なナショナリストの漫画家の一人だった近藤日出造は（中略）、小型の日本機によって法衣をまくり上げられた神父として」（p 410）敵国〈米英〉の二人の指導者の顔を描き、また「日本はABCD勢力を駆逐する灼熱の太陽として」（p 405）表現されたことを紹介している。戦時下を象徴する人物として例外的に用語編にも採録した〈ルーズベルト〉《チャーチル》は、紙芝居の中にもほぼペアで、脚本・絵画の双方、絵画のみ、脚本のみと3つのパターンで登場する。絵画としては、リングを齧る黄色（チャーチル）と緑色（ルーズベルト）の芋虫（『敵だ！倒すぞ米英を』近藤日出造画、1942.12）、プリンス・オブ・ウェールズ号で大西洋憲章締結の洋上会談に臨む軍服着衣のチャーチル、スーツ姿のルーズベルト（『英東洋艦隊全滅す』1942.11）、アジア人が引く米英乗合馬車の二人の馭者（『大建設』1942.3）、地獄の鬼に捉えられたルウ介、チャア六、セウ吉という名の亡者（『閻魔の廳』1944.12）など多様であり、『一億楠公』1944.10のように、NBC、CBSのマイクの前で絶叫的演説をするルーズベルトのみを描いたものもある。脚本の言葉上の過激さに比べて、どこか愛嬌を残した（或いは窮地に追いこまれて困惑・混乱したというべきか）紙芝居絵画の人物像は、ダワーが指摘する「英米の報道機関で氾濫した徹底的に非個人化、非人間化した日本人の絵画イメージ」と対照的な「擬人化されることが多かった」動物イメージ、「獣性、鬼、鬼畜、発狂したか墮落した人間」によって形象化された日本漫画の特徴（同p 405）と重なるところかもしれない。



図3 紙芝居『大建設』より

脚本用語に戻ると、米英の〈暴戾・暴虐〉《暴慢無礼》《搾取》に対して《正義・人道》《破邪顕正》の戦いを挑む日本の軍隊が、『軍神の母』1942.6、『光の歌』1942.7、『中澤挺身隊』1943.10などの皇軍もの紙芝居で描かれる。また『スパイ御用心』1941.12、『防諜戦士』1942.6などの防諜もの紙芝居では、『持てる国(者)』に対する《欧米賛美主義》《外国崇拜》を戒め、『米英恐怖症』に陥らない〈外国人〉への備えが銃後の国民に対して説かれる。

太平洋戦争初期の戦果で「勝利病」に酔っていた日本軍は、しかしその後、1942年6月ミッドウエー海戦の敗北を転機として、1942年8月ガダルカナル島の戦い、ソロモン海戦からの転進、1943年4月18日司令長官山本五十六の撃墜死、1943年5月アリューシャン列島アッツ島の玉砕、1944年3月インパール作戦の歴史的失敗、1944年7月サイパン島日本軍守備隊3万の玉砕と敗北を重ねていく。〈米英撃滅〉の用語が現れるのは、この時期の紙芝居作品においてである(『光りの歌』1942.7、『踏切番と子供達』1942.10、『風呂屋の大ちゃん』1943.1、『撃ちてし止まむ』1943.3、『妻』1943.7、『銅像物語』1943.8、『空の軍神加藤少将』1943.11、『山本五十六元帥』1943.12、『初陣』1944.4など)。「踏切番」「風呂屋」「妻」「銅像」といった子供向け・婦人向け作品にも、このような用語が躍り始めることを特記しておくべきであろう。

こうした外部の「敵」(ヨソ者)のイメージ化に関して、ジョン・ダワーは、「神秘的で超自然的な能力」をもつ「動物の霊または悪鬼」として表現する日本の民俗宗教的伝統を指摘し、「古代初期の支配者による遠隔地の平定の敵」(夷)から、「16世紀なかばのポルトガルとスペインの船乗りや聖職者」(南蛮人)、「鎖国期のヨーロッパ人」(毛唐、紅毛人)、「19世紀に開国を迫った西洋人」(攘夷)に至る例を挙げながら(p.395～400)、「戦時中の敵に対する日本のプロパガンダの支配的な隠喩」は「半宗教的な鬼または鬼畜へ移行」するという(p.409)。紙芝居作品の中に最初に登場する「敵=鬼」の表象は、『赤鬼』(『進め一億、火の玉父さん』1942.2)であり、『鬼畜米英』(『空飛ぶ御盾』1943.8、『神兵と母』1944.9)、さらに〈米鬼〉(『忠霊陣地』1944.6、『日本工具』1944.10、『我は海の子』1945.1)と、太平洋戦争の後半になるにしたがって増加することが見て取れる。日本本土への初空襲は1942年4月18日のドーリットル空襲であるが—このとき朝日新聞は「鬼畜の敵、校庭を掃射」と報じる(櫻

本富雄『空席通信』第12回「少国民の殉職をめぐって」)—ダワーは、「短波のプロパガンダ放送、日本の諸都市に対する焼夷弾爆撃の開始と、本土侵攻のための具体的な計画作り」を可能にした1944年のなかばのサイパン占領(日本軍における絶対国防圏の崩壊)が、米英鬼畜視の転換点となったと指摘している(p.412)。「婚約者から頭蓋骨を贈られた若い女性の写真」(p.417)を載せたアメリカの写真誌『LIFE』(1944年5月22日号)が、米兵の残虐な印象を日本国民に植え付けたことも良く知られているところである。



図4 『写真週報』第267号p.5
「ばくらの友達を射殺した米機の仇はきつと討つぞ」

戦時下紙芝居における「敵の顔」の形象化に関連してもうひとつ指摘しなければならないことは、先に述べた「脚本の言葉上の過激さ」、言い換えれば肩肘張った強がりの裏側に貼りつくように、近代日本国家の遅れと弱みを示す表現が少なくないことである。例えば、『持てる者の無礼と傲慢』(『宣戦』1942.12)、『米英共はどんなに背が高かろうが鼻が高かろうが虫ケラも同然』(『敵だ! 倒すぞ米英を』1942.12)、『世界の誇る二大強国米と英 相手にとって不足はない』(『大建設』1942.3)、『世界の横綱であった米英を向うにまわし』(『小楠公の母』1943.03)などの脚本である。自国の後進性と戦力的弱小性の自覚とのギャップが、このような表出を実現してしまうことについて、ダワーの原著よりほぼ10年早く、橋川文三が『黄禍論』(筑摩書房、1976.8、以下引用は岩波現代文庫、2000.8.17)において、「(近代日本の人種論的軋轢は)むしろ白色人種の事実上の優越によって刺激され、絶望的にまで高められた抑圧感から生まれた倒錯的信念に近いものであった」(p.202)と書いていることを想起したい。ダワーがいう「英米の報道機関で氾濫した徹底的に非個人化、非人間化した日本人の絵画



イメージ」との対比についても、橋川に「白人たちが日本人に対して集中した人種差別に比べるならば依然としてやはりふっきれないコンプレックスの影をとどめている。黄色い野獣として日本を見る彼らの姿勢の方がより明瞭であった」(p 232)と同旨の指摘がある。戦時下の日本において、この抑圧的心情・劣等性の倒錯は、対外的には「大東亜共栄圏によるアジア解放の聖戦理念」(既述)へ転化したであろうし、国内的には「人種哲学に代位するものとしての民族の政治的優越性(万世一系・皇統連綿・天壤無窮等)」(p 208)を宣揚した『国体の本義』1942年に象徴的に顕現化するだろう。

04/ 国際関係：枢軸国

この[国際関係：枢軸国]に採録された用語は、上記に紹介した[02/ 国際関係：アジア]、[03/ 国際関係：非枢軸国(欧米)]に現れる用語に比べて、登場回数5回の〈ドイツ(人)〉のほか、『日独伊同盟(三国条約)』2回、『イタリア』《枢軸(諸国)》各1回の合計4件と極端に少ない。敵愾心を煽り戦争体制への精神動員を図ることを基本的性格とするプロパガンダ作品群において、同一陣営の姿を描く必然性も創作動機も低いのは、ある意味で納得されるところではある。

ともあれ関連用語の登場場面を挙げると、〈ドイツ(人)〉は、友国ドイツ軍・艦隊の侵攻(『草鞋長者』1941.7、『英東洋艦隊全滅す』1942.1.21)、贅沢を諷める謹厳質素な在日ドイツ婦人(『母さん部隊長』1939.4)であり、また、〈ドイツ(人)〉〈イタリア〉として採録した独伊八カ国の国民政府承認(一蒋介石に代わる新たな交渉相手として日本が擁立した南京汪兆銘政権で枢軸側八カ国が承認。『光りの歌』1942.7)である。《枢軸(諸国)》は、大陸横断試験飛行によって大東亜・枢軸諸国を結ぶ南方航路を開拓した『「神風」の飯沼正明』1943.9に登場する。

さらに、当時の[国際関係・枢軸国]のもっともリアルな表象として、『日独伊同盟(三国条約)』の用語が、これまでで紹介してきた『大建設』1942.3、『敵だ!倒すぞ米英を』1942.10の二作品に現れる。これは、1941年4月から野村吉三郎駐アメリカ大使とコーデル・ハル國務長官との間で行われていた国交調整交渉におけるアメリカ側の提案(1941年11月26日「ハル・ノート」)中の「他ノ諸国ノ国内問題ニ対スル不関与ノ原則」の主項目「①中国・仏印からの全面的無条件撤退、②満州国・汪兆銘政権の否認、③日独伊三国同盟の実質的廃棄」を、

日本側が事実上の最後通牒と受け止め、米英への宣戦布告に至ったという文脈の中で登場する。『大建設』では「無法な注文」「他国の主権を無視した暴慢無礼な提案」、『敵だ!倒すぞ米英を』ではまさに「最後通牒をつぎつけた」、「まるで喧嘩の果し状ではないか」と最大級の悪罵が投げつけられる場面である。



図5 紙芝居『大建設』より

05/ 国際関係：戦闘地(交戦、作戦、戦争)、戦局

国策紙芝居の時局認識の5番目の括りとして、日中戦争から太平洋戦争に至る時期の[国際関係：戦闘地(交戦、作戦、戦争)、戦局]をまとめた。採録用語数は、「戦闘地としての地名」を中心に43件を数える(その中には歴史ものの作品の地名と偶然同一のものもあるが、極く少数のため誤差の範囲として扱うこととした)。

総称としての〈大東亜戦争〉—最多23回以外の用語と出現回数を、地域別に示すと以下の通りであり、東南アジア、太平洋の比重が中国大陆よりも2倍以上高くなっている。

中国大陆関係：13件、47回

支那事変(盧溝橋)23、南京(攻撃(略))5、満州事変5、香港4、漢口2、山東省第四区軍(抗日戦争戦区)1、錦州占領1、広東1、山西1、支那事変記念日1、支那派遣軍1、徐州1、武漢1

東南アジア、太平洋関係：29件、109回

太平洋17、ハワイ(真珠湾、海戦)15、シンガポール8、フィリピン8、マレー(半島)8、ジャワ(沖海戦)6、台湾(海峡)6、スマトラ4、ソロモン(諸島、海戦)4、マレー沖海戦4、ボルネオ3、アッツ島2、ガダルカナル2、グアム2、ダバオ2、ニューギニア2、マーシャル諸島2、マニラ2、マラッカ2、ウエーキ1、クエゼリン島1、サイパン1、サンゴ海海戦1、テニヤン1、

バタアン半島 1、パレンバン 1、ブーゲンビル島 1、ルソン (呂宋) 1、西太平洋 1

また、本分類の用語を一つでも脚本中に含む作品は、71 点 (本センター所蔵数の約 29%) にのぼることを確認しており (筆者手元資料による別途カウント)、作品数としては別表「中分類」の中で上位に属するのではないかと考えられる。同じく一作品中に「戦闘地としての地名」を多く含むものとしては、11 件『光りの歌』1942.7、8 件『進め一億、火の玉父さん』1942.2、同『敵だ! 倒すぞ米英を』1942.12、7 件『空の軍神加藤少将』1943.11、6 件『大建設』1942.3、同『山本五十六元帥』1943.12 などの既出の作品タイトルを、ここでも挙げるができる。今戦っている戦争の世界性を訴求する効果が、脚本中に多くの戦闘地名を配することによって生み出されている。

出版年と用語の相関で見ると、所蔵作品 241 点の出版年は、1941・1942 年が山を成して以降漸減する (年報 10 号 P368) のに対して、「戦闘地としての地名」を含む作品 71 点は、1940 年以前 2 点 (2.8%)、1941 年 13 点 (18.3%)、1942 年 17 点 (24%)、1943 年 19 点 (27%)、1944 年 18 点 (26%)、不明 1 点 (1.8%) と、1942 年から 1943 年にかけて一年遅れで増加している。東南アジア・太平洋で激化した戦闘が、紙芝居作品 (それはとりも直さず国内生活を意味する) に身近なものとして侵入してきていることがうかがわれる。

その一方で、個別の用語一例えば『ハワイ (真珠湾、海戦)』の例を見ると、1942 年刊行作品を中心に、「対日米開の戦臨時ニュース」、「初期の打ち続く戦果」の場面や、「1942 年 4 月 30 日東条内閣によって 実施された『翼賛選挙』」の枕詞として使用されているのに対して、1943 年後半以降の作品では、そのような使用例がほぼ姿を消し、『山本五十六元帥』1943.12 では「大正 10 年アメリカ・アナポリス海軍兵学校」での回想シーン、『發明への道』1944.4 では「真珠湾攻撃にも使用された潜水艦を動かす蓄電池」の發明となり、さらに『神機いたる』1944.11 に至っては「初期の大戦果への気のゆるみ」を観客に訴える文脈に登場するということに、興味深いストレートな変化も見られる。

以上、本来ならば作品に沿った戦闘地の分析をさらに行う必要があるところだが、複雑な戦史に関する筆者の知識不足とともに紙幅の制約もあるため、今後行うことになる個々の作品解題での言及・分析を期し、ここでは専ら用語の定量的な傾向性を指摘することとした。

戦時下紙芝居の (背景ではなく) 「主題としての国際関係」を対象とした本稿 (連載第 1 回) は、脚本そのものに分け入った説明よりも、むしろ作品群の時代認識に対する包括的なアプローチに自ずと比重を置くことになったが、次回以降で対象とする分類項目においては、採録用語の使用例を含めた紹介にも重点を置くこととしたい。 (続)

<付: 参考資料>

戦時下に数多く出された出版統制資料の中から、本文 [03/ 国際関係: 非枢軸国 (欧米)] で言及した「敵の顔」の形象化に密接に関連する文書として、『資料日本現代史 13 太平洋戦争下の国民生活』 (大月書店、1985.7.22) 所収「資料 26 雑誌指導方針実現方策 (案)」を参考資料として掲載する。資料解題によると「国立公文書館所蔵・米国返還文書『雑誌指導資料』と題された情報局第二部出版課関係資料の綴に収録され」、「作成年代を断定する根拠を欠くがほぼ同時期 (1944 年 引用者注) のものとみてさしつかえない」とされているものである。(読み易くするために現代仮名遣いに改め、本稿に関連する箇所のみを抜粋・掲載する。)

雑誌指導方針実現方策 (案)

- 一、 趣旨 (略)
- 二、 実現方策
 - (一) 敵愾心の徹底的昂揚
 - (イ) 参謀本部並に軍令部 (ママ) に保存、未公開の戦闘詳報の国民への発表 (但作戦の経緯を除く) / (注) 陸軍に於ては国民戦史奉公会に於て企画中
 - (ロ) 曩次対日放送に於て米英首脳は何を高言せるや、内地新聞、ラジオ、雑誌等の之が取扱方を見るに概ね「笑殺」或は秘匿するに一致せる如きも、其の如きは敵愾心結集に些かも資することなし。好材料を宜しく流したるものなるべし。余りに曲なき扱方なり。
 - (ハ) 具さに欧州に於ける戦場報告を語らしむるも一方法なり。
 - (二) 空襲被害、人馬殺傷の表現も写真等を謀略的に大いに活用すべし。
 - (ホ) 米英の所謂「私刑」政策、「分割統治」の原則による西南太平洋、フィリピン、ビルマ、マライ、ジャワ等の攻略、虐殺政策の事実を知らしめよ。／彼等は敵なり、不倶戴天の敵は一兵、一人と雖も之を生かすべからず。／日本の漫画を見るに、ルーズベルト、チャーチルを描きて、ユーモラスなり。文章亦単純拙劣なり。／到底独ソ欧州の政治漫画に比すべくもあらず。／ソ連紙に掲載せられたる盟邦元首の漫画の、日本人にすら嫌悪感を催さしむるに比すれば、日本人作家、画家等の敵愾心は余りに浅薄なり。
 - (ヘ) 米英人の感覚的にして、動物的支配欲のみなる下等動物感未だ国民に徹底せず。宜しく斯る意味に於て米英抹殺論を喚起すべし。
 - (ト) アメリカの文明何ぞ。英国何ぞ。その根底たるジンギス・ハンを徹底的に剔抉すべし。
- (二) 生産の飛躍的增加 (略)
- (三) 国民生活の明朗闊達化 (略)
- (四) 三原則の調和 (略)



別表 分類用語一覧

NO	大分類：中分類	用語（五十音順）	件数	NO	大分類：中分類	用語（五十音順）	件数	NO	大分類：中分類	用語（五十音順）	件数	NO	大分類：中分類	用語（五十音順）	件数
01	国際関係 ：明治～昭和初期（1930年以前）	日露戦争	14	07	日本軍 ：軍隊・軍務	戦地（戦場）	22	14	国内社会 ：国史	神風（飛行機も）	5	21	国内社会 ：勤員・奉仕・生活改善	貯金（貯蓄、貯蓄韓国、共同貯金、通帳、郵便貯金、落葉貯金、国体貯金）	21
		ロシア（露国）	7			戦友	16			西郷隆盛	4			勤労奉仕（韓国）	8
		フランス	7			敵機（襲来）	12			敵国降伏	4			国債（支那事变国債）	8
		第一次（欧州）大戦	4			輸送船（団）	11			南朝	3			闇取引	6
02	国際関係 ：亜細亜	日清戦争	4			海軍（省）	9	15	国内社会 ：国体明徴、日本精神	天皇（陛下）（すめらぎ）	31			人手不足（労働力不足）	6
		大東亜共栄圏（東洋新秩序、東洋平和、アジアの盟主、建設）	22			太平洋艦隊	7			皇国（或いはミクニ）（の御機）（の興亡）	28			貯金 額 135 億、170 億、100 億	6
		南進（方、海、国、洋）	18			訓練	6			日の丸、日章旗、国旗	28			代用食	4
		蒋介石	13			帝国海軍	6			神国日本、神州	12			買い溜め、売り惜しみ	4
		満州（国）	10			敵前上陸	6			大神、大君	12			物資不足	4
		ビルマ	8			連合艦隊	6			天子様	12			ラジオ体操	3
		支那（大陸）	7			軍旗	4			大和魂（心）（敷島の〜）	11			切符制	3
		インド（印度）	6			軍服（飛行服、防寒服）	4			大御様威（おほみいつ）	10			日記	3
		アジア（亜細亜）	5			敵陣	4			臣民（の道）	8			配給	3
		重慶	5			夜襲	4			勤王	7			保険（金）、年金	3
		仏印	5			友軍	4			愛国	6			御奉公	26
		タイ（泰国）	4			行軍	3			天祐（神助）	6			一億一心	10
		上海	4	08	日本軍 ：兵器・軍備	守備隊	3			明治天皇	6	22	国内社会 ：標語	贅沢（は敵だ）、浪費	8
		蘭印	4			陸海軍	3			紀元 2600 年（皇紀 2600 年）	5			隠忍（自重）、堪忍袋、忍苦	7
		南支	4			飛行機	12			宮城（皇居）	5			一億国民（民一億）	6
		蘭印	4			荒鷲	11			尽忠（報国）	5			時局（の認識）	6
		ボルトガル	3			艦艇	8			聖恩、聖慮、朝恩、皇恩	5			非常時	5
		安南	3			潜水艦	7			大御心（を奉戴、を安じる）	5			愛国行進曲	4
		抗日支那（暴民）	3			駆逐艦	4			朝廷	5			火の玉	4
		支那（子供、人）	3			焼夷弾	4			天照大神	5			旧体制（自由主義、個人主義、唯物主義）、旧秩序	4
		中華民国	3			海鷲	3			国運（隆盛）	4			一致協力（団結）（協力一致）	3
		朝鮮	3			魚雷	3			尊王（攘夷、愛国）	4	23	国内社会 ：防諜、防空	拳国（一致）	3
		東洋（侵略）（東亜侵略）	3			軍刀	3			日本精神（魂）	4			撃ちて止まむ	3
		東洋平和	3			手榴弾	3			日本男子	4			持場持場	3
03	国際関係 ：非枢軸国（欧米）	北京	3			落下傘	3	16	国内社会 ：政治外交	悠久の大義（光栄）	4	25	固有名詞 ：地名（日本）	空襲、空爆	8
		北支	3			航空隊、航空部隊、航空兵、飛行兵	10			大和民族	3			防諜（スパイ）	6
		アメリカ（人）	25			上等兵	10			七生報国	3			宣伝、謀略、流言	3
		イギリス（英吉利）（英国）	24	09	日本軍 ：階級、兵科・兵種・各部	部隊長	10			臣道実践	3			東京	8
		米英	16			将兵	9			赤子（天皇の）	3			九州	7
		ルーズベルト	12			一等兵	7			大日本帝国	3			京都	3
		米英空軍	9			兵曹（長）（曹長）	7			万世一系	3			横浜（港）	3
		チャーチル	8			兵曹（長）（曹長）	7			明治維新	3			横須賀	3
		欧米（ヨーロッパ）、英米仏蘭	7			伍長	6			選擇	3	27	人物：登場人物	母（軍国、軍神の、銃後の）	33
		外国	4			少年飛行兵	6			国難、国家非常、国の危急、国の一大事	12			兄	21
		臺灣	4			中尉	6			新体制（秩序、時代）	5			父	14
		A B C D 包囲網	3			大尉	5			総力戦	4			妹	8
04	国際関係 ：枢軸国	外国人	3			少尉	5	17	国内社会 ：生産、食料、資源	高度国防国家	3	28	昭和期	村長	5
		米鬼	3			中將	4			戦時体制（戦時下）	3			長子	3
		暴民、暴虐	3			水兵	3			総選挙	3			江戸	33
		ドイツ（人）	5			大佐	3			総動員	3			明治	15
05	国際関係 ：戦闘地（交戦、作戦、戦争）、戦局	支那事变（盧溝橋）	23	10	日本軍：教育	少国民	7			大政翼賛	3			大正	0
		大東亜戦争	23			出征（兵士、軍人）、征途	24			東条英機	3			昭和期（特定不能）	19
		太平洋	17			出征（兵士、軍人）、征途	24			工場	22			1925 ～ 1936 年まで（支那事变前）	4
		ハワイ（真珠湾、海戦）	15			招集令状（赤紙）	9			水田、米	16			1937 ～ 1941 年 12 月まで（支那事变以降日米開戦まで）	56
		シンガポール	8	11	日本軍 ：徴兵、出征、帰還	帰還（兵士、勇士）、帰国兵	9			食糧増産	10			1941/12 日米開戦	10
		フィリピン	8			出征家族（遺族）	5			科学（する）、科学知識、科学日本、科学戦、技術	8			1942 年	16
		マレー（半島）	8			内地送還（帰還）	4			全（金属）売買、収集、金属回収令、銅鉄回収、ボーキサイト、鋳、ニッケル、補助貸回収	8			1943 年	12
		ジャワ（沖海戦）	6			国民皆兵（令）	3			職域奉公、職分奉公、職場は戦場	8			1944 年	13
		台湾（海峡）	6			在郷軍人会	3			電気（発電、電池、蓄電池）	4			1945 年	1
		南京（攻撃（略））	5			戦死（者）	25			ゴム	3	18	国内社会 ：交通、通信、メディア	不詳（乃至架空）	31
		満州事变	5			慰問（品、袋、文）	14			工員	3			外国	9
		スマトラ	4			英霊（英魂）、忠霊	12			少年工	3			合計	241
		ソロモン（諸島、海戦）	4			護国の神（華、鬼、英霊）	12			石油、石炭	3	19	国内社会：教育		
06	日本軍：皇軍物語一般	マレー沖海戦	4			遺骨、遺品、遺影、遺言	10			手紙、郵便、ハガキ、電報	43				
		香港	4	12	日本軍 ：戦死傷、慰問、勳章・功労	傷病軍人（傷兵、傷病兵）	8			汽車	15				
		ボルネオ	3			名譽の戦死	8			自動車	8				
		皇軍	28			看護婦	4			ラジオ	7				
		宣戦（布告）（詔勅）（大詔）	12			軍事扶助法（軍人援護）	4			国民学校	12	20	国内社会 ：銃後生活、銃後団体		
		武運長久	9			陸軍病院	5			銃後	36				
		聖戦（貫徹、完遂、の本義）	8			看護婦	4			隣組（隣保班、町内会）	17				
		大本営（発表、報道部）	7			軍事情報	4			常会（婦人常会）	15				
		軍神	6			武勳	3			提灯（赤～、行列）	6				
		決死隊	6			野戦病院	3			回覧板	5				
		志願（兵）	6	13	国内社会 ：宗教、民俗	神社、鎮守様、氏神様、産土の宮、山神様、浅間神社	12			少年団（少年戦士）	3				
		帝國軍人	6			靖国（の神、神社）、招魂社	12			大日本国防婦人会	3				
		肉弾（突撃）	6			八幡大菩薩（八幡宮）	6								
		長期戦	4			伊勢神宮（皇大神宮）	4								
		山本五十六	3			お守り	3								